



授業への社会文化的アプローチと ディープ・アクティブ・ラーニング

教育学部 小嶋 英夫



弘前大学教育学部・大学院での勤務を経て、2015年に文教大学に着任。専門分野は、応用言語学、英語教育学、教師教育、異文化理解教育。(米) ジョージタウン大学大学院からTESOL Certificate、(英) バーミンガム大学大学院からTEFL・TESLでMA、応用言語学でPhDを取得。学習者と指導者の自律的成長を目指して理論と実践の往還に基づく研究を続け、学部・英語専修における新しい教育プログラムの開発と現職教員研修に取り組んでいる。(こじま ひでお)

現在文部科学省が推奨するアクティブ・ラーニング(AL)を実践するためには、学習者・指導者の両者が意識改革を図り、学びと実践の共同体をより充実させる必要がある。教育改革は、「学び続ける教師」の存在が鍵を握る。卒業後に小・中・高の教育現場で活躍する文教大生たちを支援するために、社会文化的アプローチとディープ・アクティブ・ラーニング(DAL)の視点から、これからの授業の在り方を考える。

1. 社会文化的アプローチ

社会が急激に変化する中、知識基盤社会、グローバル社会、人口減少社会などに対応するために、日本の教育を支える学校教員についても、新たな時代に相応しい資質・能力の育成が求められている。その際、中央教育審議会の3答申(平成27年12月21日)、①新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について、②チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について、③これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～に示唆されるように、「協働」をキーワードとした社会文化的な側面がより重要視されている。個人としてのみならず学びと実践の共同体の一員として、専門的成長を育むことが期待されるのは、世界的な傾向であると思われる。

「協働」への注目は、グローバル化に対応した教育への新しいアプローチ全体にも見られる。「学力の3要素」を統合する「主体的・対話的で深い学び」のAL、「内容と言語を統合した学習」のCLILも一例である。後者では、内容・思考・言語・文化/コミュニティ/協働の4つを統合した深い学びを実現しなければならない。

上記の教育的潮流の背景には、「(社会的)構成主義」の考え方がある。つまり、学習は意図的で主体的な行為で、意図・行為・省察を相互に作用させながら、学習者は世界と関わりを持ち、知覚を総動員して思考を深める。行為と思考は一体のものとなり、世界を意味づけるための活動となる。学習者は積極的に意味を見出すために主体的に世界と関わり、その際指導者は学習者を支援する役割を担う。

筆者は、欧米の大学での学びの影響もあって、長年「学び中心」のアプローチを実践し

てきた。これからの英語教員は、「成長する英語学習者」を育成するために、自らが「成長する英語教師」でなくてはならない。また、社会文化的アプローチを再考し、協働的・自律的・省察的成長を遂げながら、専門的資質・能力と実践的指導力を高める必要がある。

2. ディープ・アクティブ・ラーニング

筆者が実践する社会文化的アプローチの一つとして、DALについて考える。今後教職課程においては、より実践的指導力のある教員を養成するために、教科の専門的内容と指導法を一体的に学ぶことが求められる。これまで共通科目と専門科目の区別なく、DALを意識した授業実践を継続し、実践研究として多様な学会で発表してきた。英国、北欧、オーストラリアなどの大学教育実践で浸透しているDALとは、「学生が他者と関わりながら、対象世界を深く学び、これまでの知識や経験と結びつけると同時にこれからの人生につなげていけるような学習」(松下, 2015)を意味する。学びの「深さ」の系譜として、「深い学習」、「深い理解」、「深い関与」が挙げられ、内的活動と外的活動を統合した能動性が期待される。講義や自学を通じて知識を内化した学生は、それを適用して協働的に討議や課題解決を試み、省察と修正を経て自律的学習プロセスへと向かう。反転授業で事前に個人学習したことを協働学習で定着・発展させる、あるいは自学で得た知識を活用してプロジェクト型活動を行うこともある。

ここでは、英語専修1年生を対象とする「異文化理解概論」の授業を紹介する。反転授業を応用し、受講生は授業前に個別で教材学習に取り組む。使用テキストや調査データを読み、疑問点や考えをレポートにまとめ毎回提出する。授業では持参したレポートに基づき、小グループで協働学習を行った後、各自の問題認識・アイデアを確認し、グループとしての検討事項を決め話し合う。その際、司会者、記録者、報告者、モニターの役割を交替で担う。グループ討議、発表、全体討議のサイクルで課題解決に向けて主体的・協働的な学びを継続し、最終段階で個人研究レポートを仕上げる。

授業担当者としては、授業改善に資するように、授業前・後の課題レポート、学期末の意識調査、授業観察などを量的・質的に分析

することを心がけた。異文化理解に関しては、扱う教材の難度が高く、シラバス作成の時点では、受講者の理解力に疑念を抱いた。しかしながら、授業の進展につれて、自律的学びへの意識の高揚、教育的視野の拡大、異文化理解の重要性に対する深い理解が認められた。DAL型の授業スタイルが、受講生の専門的な学びへの志向を促し、学びの深化をもたらしたと思われる。最終の研究レポートは、テキストの内容を本人なりに掘り下げ、自分自身の今後の学びの在り方につなげ、独自の解釈を施したものが予想以上に多かった。日本の英語教育の現状をクリティカルに分析し、自分の立ち位置を現時点でどのように決めるべきか、真摯に考える姿勢が芽生えたことも歓迎したい。

一方、授業改善の余地も多いと実感する。個人学習の取組は、まだまだ不慣れで充実しているとは言い難い。授業で協働学習を楽しむ姿勢は見られるが、「積極的な相互依存」、「個人の責任」、「グループの改善手続き」の点で不満が残る。トピックによっては、全体討議がうまく展開できないこともあった。異文化体験不足のために、実感を込めた発言ができないことも一因であろう。よって、筆者が体験談を語る際は、多様な具体例を紹介して認識・理解を深める手法を取り、最終の個人研究課題に取り組む段階で、各自がより深く学ぶように配慮した。

自律的・専門的成長への支援については、今後の創意工夫が重要となる。学生たちが実習生として学校の教育現場に入り授業を担当する前に、自律、協働、省察を統合したDAL型の授業に慣れ親しんでおくことが期待される。共通・専門教育の在り方を再考し、組織的に改善することが課題となろう。

引用文献

松下佳代(編)(2015)『ディープ・アクティブ・ラーニング』勁草書房



「異文化理解概論」の授業